

子どもの成長発達を理解を促す教授方法

—講義内で製作した遊び道具を用いた実践報告—

○高崎 恵美子 関西看護専門学校

キーワード：小児看護学 講義 子どもとの関わり 保育所

I. はじめに

小児看護学教育に関して池田ら¹⁾は「小児看護学の基礎教育においては、年少人口の減少に伴い、子どもの接触体験が少ない学生の増加により子どものイメージ化が難しいこと、入院期間の短縮化に伴う小児病棟の減少等、社会の人口構造の変化や制限された教育環境により、教育的効果を得にくい状況にある」と述べている。このことから、学生が子どもの成長発達を理解することは社会の動向や学生を取り巻く環境からみても難しい。この状況を踏まえて講義で成長発達を教授する際に、健全な心と体の発育を促す「遊び」に着目し、遊び道具の製作過程を通して成長発達理解につなげた。講義方法については第1報として報告し、主体的な学習と子どもへ興味をもつことが意欲につながり、成長発達理解につながったことを明らかにした。

小児看護学の教育方法について、小児看護学実習前後のイメージの変化や実習で実際に子どもと関わった結果から、講義方法について明らかにしている研究は行われている。しかし、講義で実施した演習内容を用いて子どもとの関わりにつなげた教育方法の研究は認められなかった。そこで、本研究では講義内で遊び道具を製作する取り組みが成長発達理解につながる教授方法であるか、実際に子どもとの遊びを通して明らかにしたので報告する。

II. 研究目的

講義内で実施した遊び道具の製作過程が子どもの成長発達理解につながることを検証し、小児看護学の教授方法の構築と課題を明確にする。

III. 研究方法

2018年3月の1年次に小児看護学の講義を履修した学生のうち、2018年8月の2年次に研究参加希望者8名を対象に実施した。

参加者8名の学生は講義内で製作した遊び道具を、保育所の0～5歳クラスへ1～2名に分かれて使用した。乳幼児期に実施した理由として、著しく成長を遂げる乳幼児期は年齢ごとにできることが増えていき、遊び方や使

用できる道具などに変化があり成長発達視点が明確になりやすい。そのため0歳児～5歳児クラスの子どもの対象に実施した。実施の際は、必ず保育士の見守りのもと実施した。

保育所での実施後、自由記述の質問紙を用いて回答を得たのちに分析を行った。回収率100%であった。

自由記述については、成長発達に関する学びを記述していると判断した文章を抽出しデータとした。そして、データを要約し類似した記述を集め、いくつかのカテゴリーに分類した。信頼性を高めるため分類したカテゴリーを研究に賛同する講師に確認し、合意が得られるまで繰り返し検討した。

IV. 倫理的配慮

協力施設へ趣旨を説明した。学生へは研究の趣旨、アンケートへの協力は自由意志であり、参加の有無による利益不利益はないことを口頭で説明し承諾を得た。尚、本研究は所属施設の倫理委員会で承認を得て実施した。

V. 結果

遊び道具を用いて子どもと遊んだ結果に関するアンケートの自由記述内容を表1に示す。

表1 遊び道具を用いて子どもと遊んだ結果に関する自由記述内容

カテゴリ	サブカテゴリ	コード
子どもの成長発達を促す (22)	子どものできることを増やす (14)	・遊び道具の使用 (5) ・五感を刺激 (3) ・遊び内容 (2) ・身体的発育 (4)
	子どもの心を感じ取る (3)	・優しさ (2) ・自己中心性 (1)
	子どもが自分以外の存在を認識する (5)	・他者への反応 (4) ・遊びの社会性 (1)
子どもの興味関心を引き出せる (12)	子どもの眼が輝く瞬間を引き出す (10)	・興味を引き出す (4) ・興味のある行動 (6)
	想像力を引き出す (2)	・遊びを考える (2)
子どもが相手を大切にする心が養われる (15)	友達を大切にする心が感じられる (7)	・お友達と遊ぶ (5) ・遊び方 (2)
	大人と関わる機会になる	・大人との関わり (1)
	子ども同士の思いやりが感じられる (5)	・他者への思い (3)
	自我が感じられる (2)	・自己中心性 (2)

抽出したコードの総数は49で、遊び道具を使用し遊ぶことから見えてきた子どもの様子が述べられていた。そこから9のサブカテゴリーを抽出し、遊び道具の製作過程で重要視した成長発達視点が抽出された。そして、3つのカテゴリーで〈子どもの成長発達を促す〉

〈子どもの興味関心を引き出せる〉〈子どもが相手を大切にすることを心が養われる〉を導き出した。

VI. 考察

1) 「子どもの成長発達を促す」について

講義では遊び道具を製作する年齢の子どもについて自ら学習し、グループで学びを深めてから一般論を講義する反転学習を取り入れた。反転学習について池西²⁾は「学生参加型の授業で学習意欲を高め、主体的な学習行動が期待できる」と述べている。反転学習を取り入れることで主体的に学び、グループで対話することによって、子どもの成長発達に対する理解が深まったと考える。

また、遊び道具の製作過程では各年齢の成長発達を踏まえて、色や触り心地、指の巧緻性などを熟考し、遊びを通して子どもがどのように成長していくのかと想像しながら製作する様子がみられた。このことは、遊び道具の製作が既習の知識と子どもの成長発達を結び付けることに繋がり、子どもの心や社会性も含めた成長発達を考えるとといった面の理解を促すことができたといえる。

この結果から、遊び道具の製作過程が子どもの成長発達を理解につながっていると言える。

2) 「子どもの興味関心を引き出せる」について

子どもの興味関心について厚生労働省³⁾が、「子どもは、身の回りに用意された玩具や遊具や生活用具に興味や好奇心を持ちます。また、それらに自分から関わり、満足するまで触って遊ぶことで、外界に対する好奇心や関心を持つようになります。」と述べているように、今回の「遊び」によって育まれた経験や感性が子どもの成長に影響していくと考える。

そして、今回の「遊び」は学生自身にとっても、子どもの反応と興味関心を引き出すことができたうえ、手応えを感じる機会となり、「興味関心がある」や「遊びを考える」といった自由記述の内容に表現されていた。

この結果から、子どもの興味関心を引き出すことができたことが成長発達に対する学生の理解に繋がったと考える。

3) 「子どもが相手を大切にすることを心が養われる」について

自由記述の結果から『友達を大切にすることが感じ取れる』や『子ども同士の思いやりが感じられる』とあるように学生は遊びを通し

て、子どもが人と関わる中で協調性を養うことや社会性を育てていくことを理解していた。しかし、人とのつながりについては子どもが遊ぶ中で養われていく。そのため、講義で教授していくことが難しい。

また、本研究は0歳～5歳児クラスに参加し、全員と関わった結果に対して分析をした。しかし、成長発達の一般原則として個人差がある。これについて峰⁴⁾は、「月齢だけでなく、兄弟の有無や家族構成、生育歴、幼稚園や保育園に通っているか、などのさまざまな要素が成長・発達に影響をもたらすし、遊びの様子にも大きな違いが見られる。」と述べている。

子どもの人とのつながりや個人差について、子どもと関わることで理解につながるが講義や遊び道具の製作だけでは見えにくく、実際の子どもの様子を見ることも必要であると考えられる。

VII. 結論

1. 遊び道具の製作を行う教授方法は、製作過程を通して子どもの成長発達の理解を学生に促すことができた。
2. 子どもとの関わりの中で、興味関心を引き出したことが子どもの成長発達の理解につながった。
3. 子どもの成長発達に対して講義内で社会性や個別性まで理解することは難しいことがわかった。

本研究は月齢や社会背景など細部まで考慮した研究ではなかった。本研究を通して得た課題について、今後も学生への教授方法を検討していく。

引用・参考文献

- 1) 池田友美、亀田直子、鎌田佳奈美：小児看護学教育の実践方法と今後の課題についての文献検討、摂南大学看護学研究、Vol, 1, No, 1、2013.
- 2) 池西静江：反転授業の考え方を導入した授業づくり①反転授業を理解し看護教育に活かす、看護展望、Vol, 40(5)、78-84、2015.
- 3) 厚生労働省：保育所保育指針解説書、p68-75. 2019
- 4) 峰由貴、井口絹枝 他：成長・発達段階に応じた遊びの援助—前期幼児期の遊びと看護師の役割—、小児看護、27(3)、276-281、2004.
- 5) 高崎恵美子：小児看護学の講義方法について—遊び道具の製作過程を通して発達段階を理解する—、看護展望、Vol, 43(10)、78-83、2018.